

11月5日は「世界津波の日」です

ニューヨークの国連本部で5日、「世界津波の日」の制定10年を記念したパネル討論会が開かれました。世界各国の防災の専門家らが参加し、日本からは宮城県仙台市の高校生らが参加しました。東日本大震災から来年で15年となる中、震災を経験していない世代へボードゲームを通して防災教育を行う取り組みや、防災専門の学科がある高校でのフィールドワークなどについて発表が行われました。



仙台第三高校の小松光月さん（17）は「私たちが学んだことを後世に伝えることで、命を大切にし、将来の災害に備えた社会づくりに貢献していきたい」と語りました。また、今月末に仙台市で「世界津波の日高校生サミット」が開催されることを紹介し、「災害に備えることで命を守り少しでも被害を減らせることを世界に伝えていきたい」と強調していました。（日テレNEWS 11月6日より）

今月末に仙台市で開かれる「世界津波の日高校生サミット」で議長を務める仙台第一高校の小椋琉華さん（18）は、「仙台には防災の教訓と経験を世界に伝えていく責任がある」と英語でスピーチをする予定。小松光月さんらと共に、国連本部で説明した防災教育などを振り返る。討論会后、小松さんは「改めて当事者から防災について発信する大切さを感じた」と強調しました。小椋さんも「親世代の経験も次の世代に伝えていきたい」と意気込みを語りました。（時事通信 11月6日より）



三陸沖 M6.9 地震、岩手沿岸で津波観測

9日午後5時3分ごろに起きた三陸沖で震源とするマグニチュード6.9の地震では、岩手県盛岡市などで震度4の揺れとなったほか、岩手県の沿岸で10センチから20センチの津波を観測しました。三陸沖ではその後も地震が相次いでいて、午後3時までには震度1以上を観測した地震は18回にのぼっています。震源付近の三陸沖では今月4日ごろから規模の小さな地震が続いています。

気象庁は「今後1週間程度は、今回と同じ震度4程度やさらに大きい規模の地震が発生する可能性がある」とした上で、津波を伴う地震にも十分注意するよう呼びかけています。





ちょっと耳より

安政江戸地震から170年一学ぶ、未来への防災

1855年（安政2年）11月11日夜、江戸の町を直下型地震が襲った。推定マグニチュードは6.9～7.1、死者は7,000人から1万人にのぼるとされ、江戸時代の都市生活に甚大な被害をもたらした。当時の江戸は人口約100万人を抱える大都市であり、木造住宅が密集していた。地震による建物の倒壊に加え、火災が発生し延焼したことで、多くの人命が失われた。夜間の発生であったため、暗闇の中で逃げ惑う人々の恐怖は計り知れず、炎と崩れる建物に囲まれた状況は、現代の私たちが想像する以上に過酷だったと考えられる。この地震は、物理的な被害だけでなく、社会や暮らしの構造にも大きな影響を与えた。江戸には火事に備えた消火組織が存在していたが、地震の規模に対応しきれず、被害の拡大を防ぐことは困難だった。瓦版や絵図を通じて被害状況や避難の教訓が広く伝えられ、人々は地震の恐ろしさを学び、情報共有の重要性を認識するようになったとされている。

この点においては、SNSをはじめとする現代の災害情報伝達にも通じる。情報を正確かつ迅速に、そして広く届けるという課題は、江戸時代も現代も変わらない普遍的なテーマである。また、安政江戸地震は夜間災害の特有のリスクも浮き彫りにした。暗闇での避難、家族の安否確認の困難さ、情報の制限など、当時の人々が直面した課題は、現代の災害時にも共通するものである。

さらに、この地震は都市構造や社会制度、地域コミュニティのあり方を見直す契機となった。密集地での地震被害を抑えるには、建物の耐震性や街づくり、避難計画、情報伝達体制の整備が不可欠である。江戸の人々が瓦版（新聞のようなもの）で情報を共有したように、現代の私たちが災害リスクを共有し、学びを伝えることが求められる。

歴史を知ることが、単なる知識の習得ではなく、現代社会での行動や意思決定に直結する重要な学びである。安政江戸地震から170年が経過した現在も、首都直下地震のリスクは現実のものとして存在している。過去の教訓を振り返り、今の暮らしに置き換えて考えることが、自然災害の多い日本に住む我々の責務だと考える。都市で安心して暮らすために、過去の人々の暮らしや知恵などを歴史から学び、未来に備える知恵を持つことが、私たちにできる身近で大切な防災の一步になるのではないだろうか。



「安政大地震瓦版」



「しんよし原なまづゆらひ（鯰絵）」